

# 「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

## 目 次

はじめに	1
第1章 事業の内容	2
1. 調査研究課題名	
2. 調査研究のねらい	
3. 期間	
4. 組織・検討会議	
第2章 考察と今後の取り組み	5
(1) 学び直しと学習意欲の回復につながる調査研究	
(2) 特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築	
(3) 特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援の構築	
(4) 全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究	
第3章 スケジュールと会議記録	11
1. スケジュール	
第4章 資料	12
1. 第9回検討会議	
2. 第10回検討会議	
3. 第11回検討会議	
4. 第12回検討会議	
5. 第13回検討会議	
6. 第14回検討会議	
7. 第15回検討会議	
8. 指導助言	

## はじめに

文部科学省の「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の調査研究を受託したのが3年前です。この間、様々な調査を行い、何度も会議を開き討議を重ねてきましたが、あまりにも早く時間が流れ過ぎたという心持です。

本校の定時制課程での調査研究のテーマは「学び直しと学習意欲の回復」でした。教職員が一つになり、生徒の学習意欲向上につながる試みを行うことで、小さな光かもしれないが将来の教育実践の柱となるものを見出したという確信が生まれてきました。その意味でも、本校としては調査研究を受託させていただいたことに感謝申し上げます。

また通信制課程においては、以下の3点を調査研究の対象といたしました。

- ・「特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築」
- ・「特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援の構築」
- ・「全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修」

この3点は、本校の定時制課程、通信制課程の両方の教育実践に深く関わるもので、その向上を図ることができました。通信制課程の3点に共通しているものは教材開発です。多くの教材づくりを進め、提出用レポートも改良を加えました。これまで不十分であった通信制課程に必要な学習書も全教科・全科目見直し、改訂を加えました。

ペーパーベースの教材の他、eラーニングを中心としたコンテンツ教材も大きく改良を加え、スピーディに内容を改良する体制を整えることもできました。

この調査研究を進める中で、これまでの本校の在り方を見直し、主に教材づくりが大きく前進することができた点からも受託させていただいたことに深く感謝しています。

この3年の間に、私立広域通信制高校の活動で多くの問題点が指摘され、また新聞の社会面を賑わせる事件も起こり、通信制高校の教育活動を疑問視する声も少なくありません。その反面、私立通信制高校の教育活動の良い点が全国紙で大きく取り上げられることもあり、社会からの期待感もあります。

また、全国定時制通信制校長会などで、「私立通信制高校が緩やかな単位認定をすることで、公立高校では生徒を奪われて困る」などの声も上がりました。

このような混沌とする中で、調査研究を進めるうちに、通信制の抱えている問題の根底にあるのは、通信制高校の問題ではなく、全日制高校が生徒全体を抱え込めない状況にあるのではないかと考えてきました。

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育」という考え方が打ち出されている現在、高等学校教育の段階において、不登校生や学習の遅れがちな生徒なども、全日制高校の中に居場所があってもよいのではないかとという疑問もあります。

今後も日本の社会における私立通信制高校の存在意義・役目について厳しく考えるとともに、人工知能、ICTが身近になる社会での教育のあり方と私立通信制高校の在り方も重ねて考えていかなければならないと思います。

## 第1章 事業の内容

### 1. 調査研究課題名

定時制・通信制高校が可能な学習支援の構築についての調査・研究  
＝学び直し学習による学習支援と特別な対象者への学習支援についての調査・研究＝

### 2. 調査研究のねらい

定時制・通信制高校は、勤務に従事するなどの理由で全日制に進めない青少年に対して高校教育を受ける機会を与えることを目的に設置された。しかし、全日制への進学率が高まりその対象となる青少年が激減した状況が続いている。

現状、通信制の多くでは、学習意欲の低下等で全日制・定時制での学習継続が困難になった生徒や一旦高校を退学した生徒ならびに中学校からの不登校生が入学してきている。定時制においては、学習意欲が低下し全日制への進学が叶わなかった生徒の受け皿になっている学校もある。

全日制への進学率が90%を越す現在、企業等の採用条件や進学目的のために「高卒資格」は必然となっている。そして、定時制・通信制は、「高卒資格」だけを求める生徒の行き場となり、一部の学校では本来確保しなければならない高校教育の質の低下が見られるようになった。

そうした現状のなか、学び直し学習の展開と現行の高等学校教育制度では対応が難しい対象者に対する新たな教育課程、教材開発、学習指導ならびに他の教育関係団体との協力体制や制度の問題点等について、定時制・通信制高校が実践可能な学習支援について調査・研究を実施したい。

### 3. 期間

平成29年4月21日～平成30年3月14日

(3か年の3年目)

#### 4. 組織・検討会議

##### (1) 全体会議

敬称略

No	氏名	所属	役職等
1	杉下俊雄	学校法人 科学技術学園 科学技術学園高等学校	理事長
2	吉田修		校長
3	入江哲也		定時制課程教頭・調査研究総括責任者
4	松田敏博		通信制課程教頭・調査研究総括責任者
5	永田淳義		通信制課程統括分室長
6	津島美恵		通信制課程教務主任
7	高橋教充		通信制課程教務主任
8	篠崎雅彦		通信制課程総務主任
9	矢澤謙一		通信制課程名古屋副分室長
10	原田博司		通信制課程大阪教務主任
11	豊島正人		定時制課程教務主幹
12	浦上紗代		定時制課程学年主任
13	志水良充		定時制課程学年主任
14	吉満博仁		定時制課程学年主任
15	門司新		定時制課程数学科教諭
16	高橋佳菜		定時制課程理科教諭
17	原田育治		定時制課程英語科教諭
18	高塚聡		学務部長
19	種部雅彦		戦略室長
20	弓場重貴		戦略室広報主任
21	安部良夫	株式会社デンソー技研センター	工師
22	波多野純	静岡英和学院大学	教授
23	林智幸	静岡英和学院大学	教授
24	井上登志子	神奈川県茅ヶ崎市立円蔵中学校	校長
25	大内雅子	聖母愛児園	臨床心理士
26	金子昌弘	新潟青陵高等学校	教務部長
27	森繁光	柳川高等学校	副校長

## (2) 分科会

(☆印は責任者)

## ① 第1分科会

学び直しと学習意欲回復につながる調査研究

	入 江 哲 也	定時制課程教頭
	豊 島 正 人	定時制課程教務主幹
	浦 上 紗 代	定時制課程学年主任・理科教諭
	志 水 良 充	定時制課程総務主任・学年主任
	吉 満 博 仁	定時制課程進路指導主任・学年主任
	門 司 新	定時制課程数学科教諭
☆	高 橋 佳 菜	定時制課程理科教諭
	原 田 育 治	定時制課程生活指導主任・英語科教諭
	弓 場 重 貴	戦略室広報主任

## ② 第2分科会

特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築

	松 田 敏 博	通信制課程教頭
☆	高 橋 教 充	通信制課程教務主任
	原 田 博 司	通信制課程教務主任
	矢 澤 謙 一	通信制課程名古屋副分室長

## ③ 第3分科会

特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援の構築

	永 田 淳 義	通信制課程統括分室長
☆	津 島 美 恵	通信制課程教務主任
	高 塚 聡	学務部長

## ④ 第4分科会

全日制高校において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究

☆	篠 崎 雅 彦	通信制課程総務主任
	種 部 雅 彦	戦略室長

## 第2章 3年の調査研究のまとめ

### (1)「学び直しと学習意欲の回復」につながる調査研究

#### ① これまでの調査研究および実践のまとめ

調査研究2年目に、新入生全員に入学後1年間で学ぶ、国語、社会、数学、理科、英語の教材をインストールしたタブレットを配布した。内容は授業で使用するだけでなく、自宅でも予習、復習ができるもので、本校教員がこれまでの教育活動で積み重ねたものをまとめたオリジナル教材である。電子黒板のある教室では、そのタブレットを使用し「双方向」での授業も導入した。

次年度からは2年生にも学習教材をインストールしたタブレットを使用する予定である。またタブレットはインストールされた教材だけでなく、体育の授業では、動画を録画し、運動時のフォームや動きを確認、英語の授業では自分のスピーキングを録画し、発音やイントネーションの確認をするなど使用方法は拡大した。

このタブレットの導入と並行し、新入生に対して、学校設定科目の「総合基礎」では、生徒の学力にマッチした学習活動を提供した。基本的な学習パターンはあるが、担任が生徒一人ひとりと話し合っ一年間の学習計画を作成し、それぞれが自分の学習計画に沿って学習を進めるシステムである。学力別一斉授業の形式とコンピュータを活用した個別学習をミックスしたものであり、担任は計画が作成された後も生徒との面談は続け、計画倒れにならないようにした。そのどの時間も教職員は二人体制での指導とした。活動する中で生徒の学習教材を改良し、種類も多くし、生徒が興味を失わないように配慮した。この調査研究以前の準備期間を含めると5年余りの時間をかけた「生徒一人ひとりの学力に合った学習活動」を推進する総合基礎は、この期間で軌道に乗ったと言える。

授業という学習活動だけでは、十分な成果が出ないのではないか。そのため学校生活全般を通して、生徒の活動意欲を高める活動もした。主に学校行事の運営を指導者（教員）中心から、生徒中心のものにした。学習意欲が高くない生徒の場合、全般的に活動意欲も低く、狭義の学習以外の活動でも刺激を与えて活動意欲全般を高めようという狙いである。本調査研究2期目に報告したとおり、指導的な立場の生徒は活動意欲全般を高めることができたが、その波を学校全体には広げることができなかった。

生徒全体に対して、学習意欲を高めるための試みとして「通知票」に工夫を加えて、単なる数値の記載ではなく、グラフなどを使った到達度を伝えるものにした。数値では他者との比較が簡単であるし、どうしても集団の中での序列という意味合いが強くなるからである。小さな工夫ではあったが、一定の効果は見られた。

試みの最後に、生徒全体に対してではなく、小集団に対して「習いごとクラブ」という活動を設けた。例えば、陶芸クラブでは、陶芸に興味があり、その方面に能力がみられる生徒5名から10名程での活動である。部活動と異なるのは、生徒の自主的な活動ではなく、指導の先生についての活動で、いわば校内カルチャースクールのようなものである。

その他に英語クラブ、書道クラブ、百人一首クラブ、自然観察クラブ、ICTクラブ等を立ち上げた。

生徒全体に対してではなく小集団への試みであるが、個々の得意分野を伸ばすことで、様々な質の高い作品を制作したり、英語クラブにおいては英語検定2級や準1級の合格者も出している。学校全体では、英検4級にも届かない生徒がいる中で、2級や、準1級という、これまでは届かないレベルであり、かなりの成果である。

「習いごとクラブ」という試みは、学習意欲を高めるのに大きなヒントがあるのではないかと思われる。

## ② これまでの調査研究への考察

学力があまり振るわない生徒の場合、一番不得意で敬遠する科目が英語であるが、本校では、従来力を入れてこなかった。その理由は英語学習にプレッシャーをかけるのはマイナス効果があるのではと考えてきたからである。しかし、この調査研究を受託する以前から、時代の変化に合わせて英語教育の充実を図ってきた。学力別のクラス編成、全員への英検受験の勧め、外国(ハワイ)での英語漬け研修旅行。研修旅行の事前の学習指導、そしてこの調査研究と相前後しての英語クラブ(習いごとクラブ)の創設。

また文化祭での英語レシテーション大会、英語寸劇、という従来にない英語学習の機会を広げた。通常授業の延長としての英検受験以外はすべて「少人数」での活動であり、英語クラブは10名前後、レシテーション大会へは7、8名の参加である。

少人数を対象にした英語教育であるが、池に投げた時にできる波が広がるように、少人数の活動の成果が学校全体に良い影響を与えている。スポーツの強い学校の生徒が、そのスポーツに参加していなくても、自分もその学校の一員であるというプライドを持つと同じではないかと思う。

この調査研究での一番の成果は、生徒の学力にマッチした学習活動を実施することで、生徒の学習への意欲を高める効果があること、また少人数での活動が学習意欲を高め、それが周辺の生徒にも良い影響を与えることが分かったことである。

入学した生徒の学力にマッチしたオリジナル教材を作成し生徒全員に配布するなど、全体へのアプローチと並行して、少人数を対象とした学習活動を展開することで生徒の学習意欲を高めた。

集団としての活動が主になると意欲の高くない生徒は、集団の中で目立たないように目立たないようにと行動するが、少人数の教育活動では一人ひとりにスポットが当たるからである。ただ、留意しなければならないのは、あまりにも個別の活動だけが中心になると学校全体の中で学ぶべき他者との関係づくりができなくなる点である。やりたいことだけをやれば良いという生徒を創りだしてしまう。通信制課程においてはその傾向が強く、現実にはやりたいことだけをやる、その他の学習は単位を修得するために最低限のことだけをやれば卒業はできる。その結果通信制卒業生は大学等に進学しても、卒業できないケースが多いと言われている。全日的な教育は、そのような方向性は目指さないので、集団での学習、集団での行事や活動と並行して、個別で、少人数での活動をバランスよく行うことは効果的である。

アメリカの「ショッピングモール・ハイスクール」的なものになってしまうと、社会の中でしっかり生きていく人間形成はできなくなるのではないだろうか。個人の活動を思い切りすると同時に集団での活動を大事にすることが人間形成にとって肝要であると言える。

## (2) 特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築

### ① これまでの調査研究のまとめ

この調査研究に協力してくれた高等専修学校(不登校生対象)の生徒の中に、学校には休まずにくるが、他の生徒と一切関わりをもたない女子生徒がいる。この生徒は、毎日登

校すると、個別の学習室（指導教員が配置されている）の中に衝立をたて、他の生徒からは全く見えないところで、一人学習している。その学習スタイルは学校で学ぶすべての教科に及び、教科書を写したり、ドリルを繰り返しチャレンジしている。特定の教員とは話しをするが、それ以外の教員や生徒と話すことはない。その特定の教員が時折様子を見て、「わからないことある？」と聞くと時にはうなづき、不明の箇所を指す。そして教員の説明を受ける。自分から分からない箇所を聞きに来ることは全くない。登校時間は毎日9時過ぎ、4時になると帰宅する。保護者の話では、休日はソファーにじっと座っているだけだそうだ。それはこれから来る1週間のエネルギーを溜めこんでいるように思われる。

教員から母親に、「少し教室に入る誘いをしましょうか」と相談した際も、今のままが一番幸せなのでそのままにしておいて欲しいという回答だった。

この生徒ほど極端でないにしても、同じように個別の学習室で指導教員とは話す、その他の先生、生徒とは話をしない生徒もいる。前記の生徒は自閉症と診断されている。特定の教員としか話をしない生徒はそのような診断はないが、行動パターンは程度の差と考えば、そう考えることもできるようにも思われる。

精神科医を交えた学習会では、不登校生は成長過程で他者との関係を形成できなかったことが根底にあるが、その原因はよくわからないという事を学んだ。専門家である精神科医でも「どうしたら回復するか」もわからないという。私たち現場の教員も入学してくる不登校の生徒がどう行動するかは予測できない。何事もなく登校できる生徒もいれば、やはり登校できない生徒もいる。最初から登校できない生徒もいれば、最初は登校したが途中から登校しなくなる生徒もいる。

そのような生徒を預かっている高等専修学校と共同で不登校生を中心に対処策を研究してみた。昨年の報告書の通り、回復させるプログラムはないわけで、様々な学習機会や行事を企画することで、選択して参加した生徒が「何かをきっかけに」通常の生活を歩み始めるのを待つしかなかった。回復する兆しが見える生徒は、様々な行事や活動そのものから触発をうけたのではなく、他の生徒と同じ活動をすることにより自然と「ともだち」のように他者と話をすることで回復の兆しを見せている。

大事なことは、人間はやはり人間の中でしか活動できないという事ではないだろうか。

### ③ これまでの調査研究への考察

精神科医の講演の中で、「起立性調節障害」についての話があった。これはよくわからない症状につける病名で「起立性調節障害」というものには明確なものがあるわけではないという事であった。これは非常に象徴的な話であった。

ネットで「不登校」と検索すると様々なサイトが出てくる。そのサイトの中には「不登校を治します」と書いてあるものもある。これまで不登校について学び、不登校経験の生徒に接してきた高等専修学校の先生方は、そのような考え方は持っていない。

不登校現象は「起立性調節障害」と同じで、人との接触や、社会生活をうまく歩めない生徒達にたいして大きな括りとしてつけた名称であり、対象とされている生徒達は一人ひとり全く異なる状況におかれている。不登校生として入学してきた生徒の中には、単なる怠惰で学校に行かなかった生徒もいる。それとは別に私たち教員の守備範囲をはるかに超えて入院治療が必要とされる生徒もいる。

不登校生は不登校の状態に罪悪感をもっているのが一般的である。太平洋戦争後の日本の社会には学校に行きたくても行けない生徒、学校には行かない生徒も多くいた。だが、その当時学校に行かないことに対して罪悪感は少なかったと思われる。しかし、今の生徒

は学校に行かないことに罪悪感を感じ自分を責めるのは、それだけ学校が肥大化したからである。

現在、「フリースクール」などへの補助金なども検討されている。通常の学校制度の中では社会に出ていけない生徒には別ルートの検討なども必要ではあるが、「学習内容の質」「人間形成のあり方」などを考えると容易に結論を出せる問題ではない。共同研究をお願いした高等専修学校は県認可のものであるが、高等学校に比較して学習内容に自由度がある。自由度があることは不登校生には適切な指導ができる可能性が高くなる一方、それが「学習の質」の低下につながると問題である。

通信制高校として不登校生を教育している教育機関に対してすべきことは、高等専修学校の学習内容を十分に尊重しながら、その生徒に対して高等学校相当の学習内容を提供し、保証することである。

### (3) 特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援体制

#### ① これまでの調査研究

サポート校と私立通信制高校との関係が以前より問題となっている。通信制高校がやるべきスクーリングや定期試験などをサポート校の職員に丸投げされている点が問題である。スクーリング、レポート添削、定期試験の実施などは、本来すべて通信制高校が行う義務がある。サポート校は生徒の学習支援をするだけならば、卒業資格取得については、大きな問題はないと考えられる。今回の調査研究は、他の教育機関と通信制高校との関係についてのものであるが、問題になっているサポート校と通信制高校の関係とは全く別のものである。

「特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援体制」の調査研究は、特化した学習をしている生徒に対して、通信制高校としてどのような学習支援ができるかである。

今回の調査研究した「特化した学習」をしている生徒たちは通信制高校で学びながら、理容・美容師資格取得を目指している生徒と、バレエのプロダンサーを目指している生徒達である。

具体的な内容としては、理容・美容を目指している生徒には、その特化した学習に関連した内容を高等学校の選択科目の中に入れる試みである。理容・美容を目指す生徒には理科特講、数学特講などで資格取得（国家試験）の内容と重なる部分を学習させ、その学習内容をレポートの一部として提出させた。バレエのプロダンサーを目指している生徒には、必須の学習である栄養学を家庭科の特講的な扱いで高等学校の学習と重なる部分を学習させた。

#### ② これまでの調査研究への考察

これまでの実践は、理容・美容やバレエダンサーという特化した学習をしている生徒に対して、単にその専門的な学習の一部を高等学校の学習に加えただけという見方もあるかもしれない。だが、この小さな試みにも大事なポイントがある。

通信制高校は自学自習が中心で、レポート作成も大変だという見方もあるが、通信制高校の学習内容は時代の流れの中で大きく変わってきている。太平洋戦争後、学校制度は大きく変化した。当初の高等学校はまだまだ選ばれた者が進学する場所であった。それが、

高度経済成長を過ぎ、高等学校教育も大きく様変わりした。それに伴い、学習内容も多様化し、教科書も学習レベルの異なるものが多く検定を経て出版されている。同じ科目でも教科書によって学習内容のレベルには大きな違いがある。その中で通信制高校が採択している教科書は学びやすいものが多い。通信制高校が発足したころは、そのような状況はなかったもので、レポートもかなり難しいものが多かった。

現在は教科書そのものが分かりやすくなっているため、レポートも作成しやすくなっている。その点で、特化した学習をしている生徒は、通信制高校の学習を機械的にこなしているケースが多く見られる。プロダンサーを目指す生徒達からは、レポート作成は簡単という声が聞かれる。その中で自分の特化した学習と関連した内容が高等学校の学習にあることにより、高等学校の学習が単に「卒業資格」を取るためのものでなく、自身の将来のための大事な学習として感じられるようになる。

1科目、2科目であっても、多種類のレポートや学習書を作成しなければならなくなり、教員の業務量は増加し、少部数での印刷製本の問題も出てくるが、印刷もオンデマンド印刷ができる時代になり、今では十分に対応できるようになった。

#### (4) 全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究

##### ① これまでの取り組み

本校はこの調査研究以前、他の私立高校と全通併修を結んでいた。この3年間に全通併修を結ぶ私立高校が3校増え、現在4校の私立高校と全通併修を結んでいる。

その活動は大きく2つに分けられる。ひとつは、様々な理由により、特に3年生になって登校ができなくなった生徒が、本校通信制で科目履修生として単位を修得し、在籍校での学習成果を認められ、入学した学校を卒業していくケース。

もう一方は、教室に入れない生徒の自学自習用の学習教材の提供である。通信制高校では学習書が必要であり、本校では生徒の実態にあった学習書をこれまでも多く作成している。そのため、教科書に合った自学自習用の教材作成の技量は教員にしっかり身に付いている。その点で、必要とされる教材を短期間で提供できる環境にあり、単位の認定ではないが、通信制高校でできるサービスをしている。

##### ② これまでの調査研究への考察

太平洋戦争後、通信制高校が発足したが、真の通信制高校の発足は通信制高校だけで高校の卒業を認められるようになった時である。その頃、通信制で学ぶ生徒の多くは、現在の状況とは違い、何らかの職業に就いていたケースが多い状況であった。

通信制高校は教科の学習が中心で、全日制高校の教育で重要な役割のある行事や部活動、生徒会活動などはかなり縮小されている。高校時代に学ぶべきことは教科の学習だけでなく、人間形成の面から考えて、行事や部活動、委員会活動も重要な学習である。通信制高校においては発足時より人間形成に重要な役目のある行事や部活動、委員会活動などは縮小されていたが、発足当初の生徒は何らかの職業に就いていて社会人としての実生活があり、その社会人としての日々が人間形成に大きな役目を負っていたと思われる。

現在、通信制高校の制度は発足当時と変わっていないが、そこで学ぶ生徒の状況は全く違ったものになっている。職業に就いている生徒はわずかで、ほとんどの生徒が学齢期であるにもかかわらず、人間形成に必要な行事や部活動、委員会活動などがないまま、教科

の学習だけをして卒業していく。

もちろん「通学型」などの名称で全日制と同じような教育活動を行い、部活動を取り入れている通信制の学校も存在している。そのような「全日スタイル」の学校の問題はここでは別のこととしたい。

全日制高校と通信制高校のコラボである全通併修を実施する場合、そこに大きな問題が生じてくる。全日制高校を卒業することは、教科の学習のみではなく、学校行事や部活動などを通して人間形成に必要な活動をしたことを意味する。その集団の中で教科の学習をただけの生徒も同等に卒業させて良いのかという問題である。

現在通信制高校には、不登校や病気、また学力の問題などで全日制高校に進学できない生徒や、全日制高校からドロップアウトした生徒が学んでいる。もちろん一部通信制の「ゆるやかさ」を肯定的に受け入れ、入学している生徒もいる。そのような場合を除き、通信制高校は全日制高校の下請け的な存在、あるいは全日制高校で受け入れられなかった生徒の受け入れ場所になっているともいえる。その意味で考えるとこの全通併修という制度は、それを繋ぐ役目も担っていると言える。全日制高校が柔軟性を増すとこのような制度を通して、ドロップアウトを防ぐことができるようになる可能性はある。しかし、本校の全通併修で、単位の修得を目指す場合は非常に例外的、緊急避難的なケースとして扱われている。今後この制度がどのように変わっていくかは全く不明である。

### 第3章 スケジュールと会議記録

#### 5. スケジュール

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」は、平成29年5月22日に受託し、平成30年1月まで調査研究した。

##### (1) 会議

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
全体検討会議	○		○	○	○	○	○
第1分科会				○		○	○
第2分科会		○				○	○
第3分科会						○	○
第4分科会			○		○	○	○
講演	○	○		○			○

全体検討会議は3回、各分科会は全体会議の後の分科会のほか、第1分科会は3回、第2分科会3回、第3分科会は3回、第4分科会は2回開催した。第2回目の全体会では「不登校」をテーマにパネルディスカッションを開催した。また、第2分科会の会議は他の民間教育機関との研究協議会として開催した。講演会は3回開催した。

##### (2) 講演

- ① 第1回「不登校・ひきこもり生徒への学習支援」  
精神科医・家族療法家からの提言
- ② 第2回「不登校を抱える生徒たちとの関わり方」
- ③ 第3回「非主流」後期中等教育を取り巻くジレンマとその時代背景
- ④ 第4回 世界に貢献する人材の育成を目指して  
(将来誰が活躍するか分からない人材育成)

第4章 資料  
全体検討会議

会議名	第9回 多様な学習支援事業に関する検討会議
開催日時	平成29年7月6日(木) 14:00~16:00
場所	科学技術学園高等学校 C棟 会議室
出席者	別紙資料
議題等	<p>1. 平成27・28年度の活動報告</p> <p>(1) 学習意欲の回復についての調査研究</p> <p>(2) 特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築</p> <p>(3) 特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援の構築</p> <p>(4) 全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究</p> <p>(1) 定時制 入江教頭 (2) (3) (4) 通信制 松田教頭</p> <p>2. 平成29年度の活動計画及び戦略 杉下理事長</p> <p>3. 講演 不登校・ひきこもり生徒への学習支援 精神科医・家族療法家からの提言 田村 毅 様(精神科医・家族療法家)</p>

## 『第1分科会報告』



定時制 入江哲也教頭

H29 7.6

### 多様な学習支援推進事業に関する検討会議～文部科学省委託事業～

#### 第1分科会 「学習意欲の回復について」 昼間定時制課程

##### 1. これまでの取り組み

第1分科会では、学習意欲の回復のための調査・研究の一環として、授業だけでなく学校生活全般を通して生徒に意欲を持たせるための施策を、平成27年度及び平成28年度の2年間に渡って調査・研究を試みた。その取り組みの結果と全体のまとめを報告する。

##### 2. 平成27年度の活動報告

###### (1)定時制課程について ―定時制課程の生徒像― [H27 8.5]

- ①生徒募集活動における5つの柱
- ②学習に関する意識調査（1年生）
- ③入学生の学力
- ④本校生徒のタイプ分け

###### (2)「学習に対する意欲を回復」させるための取り組み [H27 11.9]

- ①教材・教具の工夫 ―タブレット端末―
- ②学校内活動の再確認（4分野11項目）

###### (3)研究授業 [H27 12.18]

- ①タブレットと電子黒板を組み合わせた、数名のグループ学習による双方向授業の実践（数学科）
- ②生徒の興味・関心を高める授業の工夫（理科）

###### (4)学習意欲の回復に向けて [H28 2.26]

- ①少人数または個別での学習活動及び課外活動の実践
- ②次年度実施項目とその課題・問題点

### 3. 平成28年度の活動報告

#### (1) 学校生活全般を通して生徒に意欲を持たせるための項目の実践及び検討

##### ① 習い事クラブの活性化

少人数指導で特化した能力を育てる習い事クラブを増やし、活性化させる。

- ・「英語クラブ」＝英語検定準1級合格
- ・「パソコンクラブ」＝平成29年10月開設に向けて準備中

##### ② 学校行事への主体的な取り組み〔H29 3.4〕

体育祭、文化祭、修学旅行などの行事について、準備段階から生徒グループにコミットさせ、自分たちの行事だという意識を強め主体的に取り組ませる。

- ・「行事の在り方について ― 生徒の主体性を大切にした体育祭」

##### ③ 評価方法の工夫〔H29 3.13〕

生徒に「やる気」を起こさせる評価の方法、学習の成果・結果の伝え方について研究する。

- ・「学習意欲の回復のための評価について」

##### ④ 授業でのグループ学習 ※今年度は実施せず

各教科において、授業内で5～6名のグループによるグループ学習を行う。

授業にはアシスタント教員を用い、きめ細かい指導を行う。

### 4. 2年間の活動のまとめ

#### (1) 「履修主義」から「修得主義」へ

授業において、何よりも重要なことは「何を学ぶか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」また「何ができるようになるか」の観点から学習活動を展開していくことである。そしてその学習活動の中で「学習の楽しさ」さらには「学びの回復」ということを経験できる機会を作ることが肝心である。そのために、教科書の説明に重きを置くことや履修範囲を教えることを第一とするのではなく、何を修得させるのか、そしてそれをどのような方法で身につけさせるのか等を各教科で研修していくことが重要である。

その際に大事なことは、まずはどのようにしたら生徒が生き生きと学習に取り組むかを考えなければならない。生徒に「やる気」を起こさせる原理は、やはり「少人数」「個別指導」ではないだろうか。個々に到達目標を示し、常にフィードバックをしていくことが肝要である。

また、選択科目を増やすということも「やる気」を起こさせるための重要なポイントとなるだろう。

#### (2) 学校生活全般を通じた生徒主体の活動

(1)と同様に学習意欲を回復させるためには、学校という枠の中で別の学習機会を作り出すことである。つまり、学校という生活の空間の中で学習意欲の回復を図るのである。例えば部活動であるならば、生徒間の協力により成り立つことを自覚させ、その活動の中で生徒は自分の必要性、存在理由を感じ、生き

生きと意欲的に活動するようになると思われる。また、行事において言えば、昨年度の体育祭や文化祭では生徒会が中心となって実行委員会を立ち上げ、それぞれが自分の役割を感じ、協力して活動する中で、意欲的に活動する様子が見られた。

今後も学校生活全般の様々な活動を契機として、学習面に発展させていく工夫を考えていく必要があるだろう。

### (3)教科間のコラボレーション

教科の授業という枠に閉じ込めたままでは、最終的には学習意欲の回復は図れないというのが結論になるだろう。各教科が孤立することなく教科間で連携することにより、教科を超えた横断的な学習機会を幅広く設けることや、行事等にも教科との関わりを積極的に取り入れることなど、これまでとは異なる学習のあり方を考えださなければならない。

## 5. 今後の取り組み ～修得主義の実践～

### (1)横断的な学習 —教科間でのコラボによる授業展開を図る—

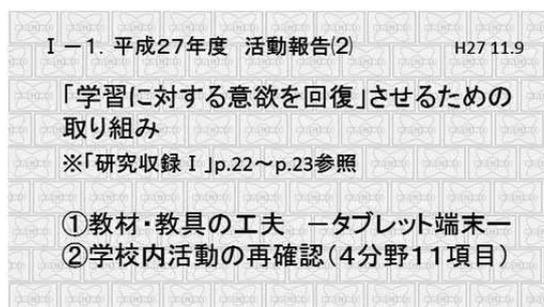
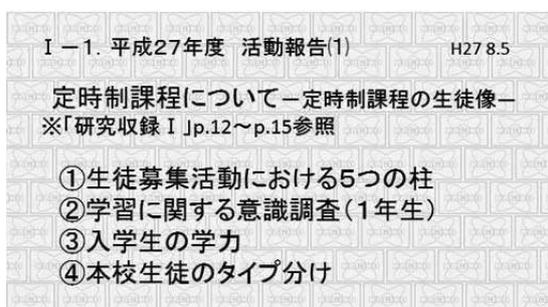
例：国語総合「りんごのほっぺ」（原爆で亡くなった少年を題材にした朗読劇）  
→地歴公民科「戦争」理科「原子力開発の仕組みと歴史」など

### (2)授業と行事の連携 —修学旅行—

例：沖縄コース  
地歴公民科「米軍基地問題」 理科「マングローブの生態」  
国語科「琉球方言」など

今後の「学習意欲を回復する」ための取り組みとして、重要な課題となるのは「いかに多角的・多面的に学習する機会を設けること」の試みであり、そして何より「各教科が孤立することなく他教科と連携していく横断的な学習を学校生活全般に渡り展開すること」であると考え、検討・調査・実践していきたい。

## <資料>



I-1. 平成27年度 活動報告(3) H27.12.18

**研究授業**  
 ※「研究収録 I」p.28～p.33参照  
 ①タブレットと電子黒板を組み合わせた、  
 数名のグループ学習による双方向授業  
 の実践(数学科)  
 ②生徒の興味・関心を高める授業の工夫  
 (理科)

I-1. 平成27年度 活動報告(4) H28.2.26

**学習意欲の回復に向けて**  
 ※「研究収録 I」p.39～p.43参照

①少人数または個別での学習活動及び  
 課外活動の実践  
 ②次年度実施項目とその課題・問題点

I-2. 平成28年度 活動報告(1) H29.3.4

学校生活全般を通して生徒に意欲を持たせる  
 ための項目の実践及び検討

①「習い事クラブ」  
 少人数指導で特化した能力を育てる習い事  
 クラブを増やし、活性化させる。  
 ・「英語クラブ」→英語検定準1級合格(H28.10)  
 ・「パソコンクラブ」→H29.10月開設予定

**学習意欲の回復について**

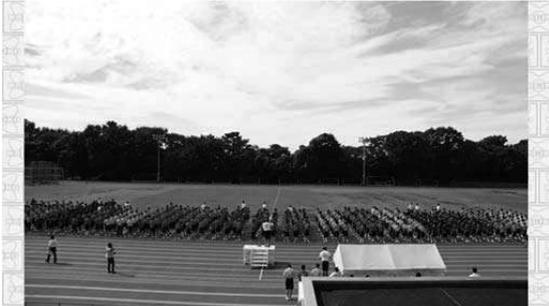
I これまでの取り組み  
 1. 平成27年度 活動報告  
 2. 平成28年度 活動報告  
 II 2年間の活動のまとめ  
 III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

科学技術学園高等学校 第1分科会

I-2. 平成28年度 活動報告(2) H29.3.4

②「学校行事」 H29.3.4

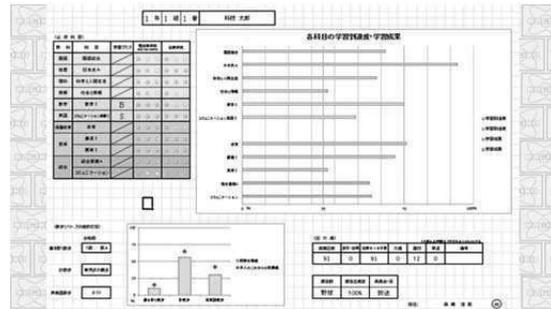
体育祭、文化祭、修学旅行などの行事につ  
 いて、準備段階から生徒グループにコミットさせ、  
 自分たちの行事だという意識を強め主体的に  
 取り組ませる。  
 ・「行事の在り方について一生徒の主体性を  
 大切にしたい体育祭」



I-2. 平成28年度 活動報告(3) H29 3.13

③評価方法の工夫

「やる気」を起こさせる評価方法、学習の成果や結果の伝え方について研究する。  
 前提として、定期試験のあり方、評価の仕方や成績の付け方等についても、併せて検討する。  
 ・「学習意欲回復のための評価について」



I-2. 平成28年度 活動報告(4)

④授業でのグループ学習

各教科において、授業内で5~6名のグループによるグループ学習を行う。  
 授業にはアシスタント教員を用い、きめ細かい指導を行う。  
 ※昨年度は実施せず

II 2年間の活動のまとめ

(1)「履修主義」から「修得主義」へ  
 ×教科書の説明に重きを置く  
 ↓  
 個々の到達目標・フィードバック  
 ↓  
 「学習の楽しさ」・「学びの回復」

II 2年間の活動のまとめ

(2)学校生活全般を通した生徒主体の活動  
 学校という生活空間  
 ↓  
 「部活動」—自分の必要性・存在理由  
 「行事(体育祭・文化祭)」—自分の役割・協力  
 ↓  
 学習面に発展させていく工夫

II 2年間の活動のまとめ

(3)教科間のコラボレーション  
 教科の枠に閉じ込めない  
 ↓  
 他教科との連携(横断的学習)  
 ↓  
 授業・行事等に取り入れる

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

(1)「教科の枠を超えた横断的な学習」

- ・教科間での連携(コラボレーション)による授業展開を図る
- (例)国語総合「りんごのほっぺ」
- ・原爆について
  - 地歴公民科「戦争」
  - 理科「原子力開発の仕組みと歴史」

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

(2)「授業と行事の連携学習」

(例)修学旅行—沖縄コース  
 →地歴公民科「米軍基地問題」  
 →理科「マングローブの生態」  
 →国語科「琉球方言」  
 など

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

<最後に>

○「多角的・多面的な学習」  
 +  
 ○「幅広い横断的な学習」  
 ||  
 学習意欲の回復を図る

## 『第2分科会報告』



通信制 松田教頭

### 特別に支援を要する生徒への 学習教材の開発 (第2分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

### 「不登校生徒」に対する結論

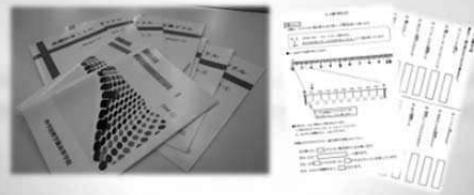
1. 不登校の生徒は一人ひとり状況が異なるため、一括して扱うことはできない。
2. サポート校等でうたわれているように「不登校がなおる学校」というものはない。

### 不登校生に対して私たちの できること

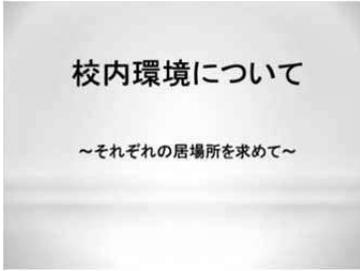
1. 基礎的な学習のやり直し教材の開発
2. 学校らしくない学校環境の整備
3. 広く世界を発見できる世界の推進

### 1. 基礎的な学習の やり直し教材の開発

生徒の学力に合った教材の提供  
漢字や計算といった基礎学力養成



調査研究に協力してくれた高等専修学校（不登校生対象）



**職員室**

既存の事務机等を撤廃し、木目調で温かみのあるテーブルを配置。  
学校の職員室＝入りづらい、という雰囲気ではなく、生徒たちが気軽に入れるように心がけています。



**職員室**

結果、職員室で学習をしていく生徒たちもいます。  
教職員にも、自分の仕事よりもまず生徒対応を優先することを徹底しています。



**癒しの動物たち**

職員室には、「ウサギ」「ハムスター」「インコ」「熱帯魚」「ヘラクレス大カブト」がいます。



**癒しの動物たち**

奥から、「インコ」「ヘラクレス大カブト」「ハムスター」です。  
※ヘラクレスは、生徒が飼育して羽化させて個体です。



**癒しの動物たち**

熱帯魚の水槽です。  
定期的に生徒たちが水替えを行っています。



**生徒の作品**

職員室にはいたるところに生徒たちの作った「手芸作品」「プラモデル」「イラスト」などが飾られています。



**通路**

以前は、雑多な物置き状態となっていた通路をリフォームし、教室でもなく、職員室でもない、空間にしました。  
教員に管理されている訳ではありませんが、近くに教員の気配はある…という絶妙な空間になりました。



**通路**

絵画制作を行う生徒。



**通路**

校内随一のハイスペックPCで動画編集を楽しむ生徒たち。  
活動の幅が広がりました。



**個別学習室**

通路の奥には、個別学習室があり、クラスには入りづらい生徒たちがここで勉強しています。  
教室感は極力排除しておりますが、常駐の教員が一人ついてくれています。



**個別学習室**



**個別学習室**

PC環境もしっかりと整っています。



**一般的な教室**

1クラス平均20名前後の教室が、各学年1クラスずつあります。



**女子専用談話室**

女子生徒専用の部屋を準備しています。  
体育の時には更衣室としても使用。  
お話ししたり、お弁当を食べたりしています。



**DIYで音楽室**

とある夏休みの1日、教員と生徒でDIYにて音楽室を改装しているところです。



**音楽室**

素敵な音楽室ができました。



**音楽室**

心が躍る、音楽の授業。  
バンドやろうよ！



### 大教室

音楽では、合唱も楽しめます。

ピアノも弾けて、ギターも弾ける、

講師の先生が楽しく盛り上げてくれます。



### DIYで和室作り

この春、和室を作りました。

床を6cm上げています。



### 和の間

素敵な和室が完成しました。

書道ゼミで使用したり、

お昼休憩には生徒たちがお弁当を食べたりしています。



### アトリエ

絵画ゼミを行っています。この夏から本格的な油絵講座も始まります。



### 読書室



### 多目的室



## 3. 広く世界を発見できる 機会の推進



エジプト展



フィッシング体験



クルージング体験



修学旅行



修学旅行



蕎麦打ち体験

## 『第3分科会報告』

**特化した支援を要する生徒への学習教材の  
開発と学習支援体制  
(第3分科会)**

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

### 社会における現状

自らの意志で通信制高校へ入学している生徒

クラシックバレエ	テニス
サッカー	ゴルフ 芸能関係 等

→目的に対する練習時間を作るため

「通常の高校では達成できない目的を持った生徒への学習支援についての調査・研究」を行う

### これまでの研究

バレエ研修所の生徒について検討してきた内容

教養を身に付けさせる…健康管理  
 ☆家庭課題研究(栄養学)  
 世界で活躍するダンサーになる…語学力  
 ☆英語課題研究(実用英語検定試験対策)

### 栄養学実践報告

日時：平成29年5月23日(火) 10:00~16:00  
 場所：講義 309教室 実習：家庭科室

講義内容：食品群別摂取量のめやす  
 個々に応じた献立の作成

食品群別摂取量のめやすで自分の一日に  
 摂取しなければならない食品の量を確認

↓

実習で確認

### 栄養学実践報告

実習内容：夕食の献立を考えてみよう  
 実習内容：テーマをもとにあらかじめ準備されている食材を用いた献立を考え、調理する。

A：低カロリーであること  
 B：ひとり暮らしでも作りやすいこと  
 C：筋肉、骨、血液をつくる栄養素が豊富に含まれていること  
 D：からだの調子を整える栄養素が豊富に含まれていること

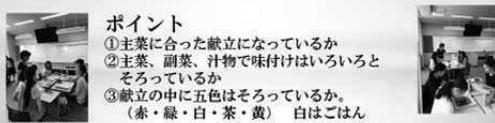
### 栄養学実践報告

主菜：こちらで指定(豚肉を使った料理)  
 主菜に含まれる材料と分量を4つの食品群別に分けて表に記入し、不足している食品群、材料と分量を把握。

⇒ 不足分を副菜・汁物で補う 一汁三菜

**ポイント**

- ①主菜に合った献立になっているか
- ②主菜、副菜、汁物で味付けはいろいろとそろっているか
- ③献立の中に五色はそろっているか。  
(赤・緑・白・茶・黄) 白はごはん



### 栄養学実践報告

主菜のみこちらで指定

グループごとの献立

<p><b>グループA：低カロリー</b>                  主：もやしつくね                  副：小松菜じゃこのごまあえ トマト、きゅうり、大根、豆苗のサラダ                  汁：しめじ、わかめのかき玉汁</p>	<p><b>グループB：一人暮らし</b>                  主：蒸ししゃぶ                  副：ツナとチーズの卵焼き 小松菜、しめじ、油揚げの煮びたし                  汁：わかめ、大根、玉ねぎの味噌汁</p>
<p><b>グループC：からだをつくる</b>                  主：豚玉キムチいため                  副：にんじん、大根、小松菜のナムル                  じゃこねぎの奴                  汁：わかめとしめじのスープ</p>	<p><b>グループD：からだの調子を整える</b>                  主：ポークビーンズ                  副：ツナ、トマト、きゅうりのミモザサラダ                  豆腐チーズ                  汁：玉ねぎ、キャベツ、人参のコンソメスープ</p>

### 栄養学実践報告

調理の様子



バレエ研修所の研修生全員を対象としているため本校の卒業生・在校生以外の生徒も参加



### さらなる学習支援の検討

普通科目に対する学習姿勢の改善

- 自分の専門とする分野のエキスパートになるためにはその分野以外の科目は単に単位を修得すればいいという考え（高卒の資格取得のため）

↓

普通科目の教材開発 → 幅広い知識を身に付ける

↓

エキスパートになるための教養を養う  
普通科目の教材の研究・開発の推進

### さらなる学習支援の検討

専門科目に対する学習姿勢の改善

自分の専門とする分野のエキスパートになるために高等学校の学習をミックスすることで、側面支援として成立するのではないか

技能連携生として学習している生徒  
企業内訓練校  
理容・美容系  
教養系専修学校

### 現在、実践中のもの

美容学校における国家試験対策

美容師国家試験科目 → 衛生管理  
科技高提供教材 →

国家試験合格と学び直しを両立

### 現在、計画中的のもの

企業内訓練校における資格取得対策

危険物取扱責任者 → 課題研究（工業）  
科技高提供教材 →

授業内での資格取得を支援ができるのではないか

### 現在、計画中的のもの

教養系専修学校における実践

郷土の歴史・地域研究 → 課題研究（地歴）  
科技高提供教材 →

自分の住む地域の歴史、地理的特徴や産業を学習することより、地域と密着した学習が成立する

## 『第4分科会報告』

### 全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と 全通併修についての調査研究 (第4分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

### 全日制高校から見た通信制高校

全日制高校からみた通信制高校の  
問題点となる事項

- ①学習量が少ない
- ②学習レベルが低い
- ③学習実態がわかりにくい

昨今における広域通信制に対する疑問や批判

### ある全日制高校との協議

高校3年生になり不登校の症状  
・朝起きられない  
・身体的な不調(頭痛・腹痛)のため遅刻の増加  
現在の在籍高校を卒業したい。

出席不足により現在籍校での卒業が難しいとの通告

⇒ 通信制高校もしくはサポート校への転学を余儀なくされる。

### 通信制高校ができること

#### 学習書の活用

通信制は規定により、授業に代わる「学習書」を使うことが決められている。

「学習書」…教科書を自学自習できるよう解説したもの基本

既存の学習書  
NHK出版

- ⇒
- ・教科書の解説が大半である
  - ・教科書の理解にとどまり、まとめたり問題を解く力が養われない
  - ・学習レベルが低い(個々のレベルに応じていない)

### 本校独自の「学習書」の開発

必修科目を中心とした科目で作成

- ・各単元ごとのポイントを押さえたうえで問題を解く。  
または発展的な調べ学習への導き
- ・英語については実用英語検定の各級に対応した教材。(検定対策としても利用可能)
- ・基礎・応用・発展の様々なレベル

### 本校教材の活用例

1. 学校には登校できるが教室へ入れない生徒  
⇒ 教材の提供  
保健室や自習室等で自学自習を行う
2. 学校に登校できない生徒  
⇒ 自宅で教材に取り組む  
本人の体調に合わせて登校  
学習の進捗状況の確認

### 現状での結論

緊急避難としての生徒に対しては「有効」である。  
単位修得→高校卒業という従来の通信制の役割で解決できる。

↓

高校卒業資格は与えられるが、根本的解決にはならない。

不登校状態を脱することにはつながりにくい、  
学習量を始めとする「学習の本来の意味」が欠落する。

- ・本来の「自学自習」を作り上げる必要性
- ・学習という観点からなら、一定の解決となり得る

## 《講演》

	<p>&lt;講演者プロフィール&gt; 1957年東京生まれ 筑波大学医学専門学群卒 同大学院修了（医学博士） 英国ロンドン大学留学（家族療法） 1992～2011年 東京学芸大学教育学部教授 専門：思春期・青年期精神医療、家族療法、メディア相談 役職：日本家族療法学会評議委員・認定スーパーヴァイザー 日本医師会認定産業医、国際家族療法学会評議委員 東京いのちの電話顧問</p>
---	---

田村 毅 先生

講演題目 『ひきこもり生徒への学習支援』

### 不登校・ひきこもり生徒への学習支援

#### 精神科医・家族療法家からの提言

田村 毅(精神科医・家族療法家)<http://www.tamuratakeshi.jp>

学校で治せるものではない。⇒不登校・ひきこもりの理解:その本質は？

- 本人の病気・障害説:医学・生物学モデルの功罪
  - 発達障害、アスペルガー障害、うつ病
  - 功:医学的説明、解決策、教師・家族の免責
  - 罪:「病気」という隠れ蓑
- 対人関係の発達途上
  - 子どもの関係性 vs. 大人の関係性
  - 守る愛 vs. 放す愛

学校でできること

- 事例)家庭訪問と家族への支援で、学校に行けるようになった高校生
- 家庭訪問
  - 功:社会との繋がり
  - 罪:「逃げ場」への侵入
  - ゲートキーパー(門番)としての家族へのアプローチ
- 教師との関係性

- 信頼できる他者(子どもの関係性から大人の関係性への橋渡し)
  - ◇ 個別の心理的結びつき
- 成功体験・自信の付与
  - ◇ 基礎的学習支援
- 生徒を取り巻く環境の整備
  - 家族との連携
    - ◇ 家族の不安、家族の「ひきこもり」
  - 専門家との連携
    - ◇ 臨床心理士
    - ◇ 民間の支援機関
      - 東京都若者参加応援事業 <http://www.hikikomori-tokyo.jp/wakamono/>
    - ◇ 医師(心療内科・児童精神科)

# ひきこもりの理解と親の対応

田村 毅(精神科医) <http://www.tamuratakeshi.jp>

## 対人関係の発達とひきこもり

思春期は大切な人との関係性が大きく切り替わる時期です。10～12 歳くらいから思春期が始まり、10 年ほどかけて大人の関係性に変化していきます。

子どもの関係性	大人の関係性
近い関係(家族)	遠い関係(学校・職場・世間)
守られたウチの世界(同質性、閉鎖系)	傷つくソトの世界(異質性、開放系)
自分中心の世界(万能的自我)	他者と折合う世界(社会的自我)
依存(対象との一体感)	自立(対象からの分離)
自己否定(自分で身を守れない)	自己肯定(自分で身を守る)・自信
傷つきやすさ vulnerability	回復力 resilience
まわりの力で動く(親のエンジン)	自らの力で動く(自分自身のエンジン)
他者(保護者)の責任	自己責任

## 子どもの関係性

子どもは自分の身を守る力を持っていません。親など近くにおいて保護してくれる人との依存関係の中に生きています。保護者から無条件の愛情を受け、安全なウチの世界で安心して成長します。自分は愛される存在であり、この世に生きていて良いのだという基本的な自信を獲得します。自分のことをすべて理解してくれる人が何をすれば良いのかを教えてください。自らの力ではなく、保護者のエンジンで動きます。したがって物事がうまくいくのも失敗するのも、保護してくれる人の責任であり、自分自身で責任を取ることはできません。傷つきを自分自身で修復する力を持っていません。自分の思い通りになる 100%を求め、それが叶わずプライドを保てない時は、傷つきを回避しウチの世界に全面撤退します(0%)。物事が思い通りに動いているうちは問題ないのですが、自分の思い通りにいかないと、すべて諦めてしまいます。

## 大人の関係性

大人は自分の力で身を守ります。どの方向に飛んで行くか自分で決めて、自分自身のエンジンで飛びます。ソトの世界は学校・職場など自分のことを十分に理解してくれない遠い人たちです。自分を全面的に受け入れてくれず、少なからず傷つきます。こうありたいという自分の思いは全部は果たせず 60-70%に目減りしますが、それを受け入れ他者と折り合います。失敗しても全面的に撤退することなく、前に進み続けるうちに少しの成功体験を得て、徐々に自信を獲得してゆきます。そのようにして、外の世界に自分の居場所を見出します。

## ひきこもりのメカニズム

ひきこもりは子どもの関係性から大人の関係性へスムーズに切り替われない状態です。自立する準備ができていないうちにソトの世界に飛び出すと、傷つきを繰り返し、自信を失い、人との関わりから全面撤退し、傷つきを避けるためにひきこもります。

## 短期間ひきこもることは心の成長に必要です

傷ついたら休むことが大切です。1-2週間程度ひきこもり、元気を回復して再び飛び出します。

## ひきこもりが長期化すると、大きなストレスになります。

ひきこもる期間が長引いても、回復するチャンスはたくさんあります。しかし、ひきこもる期間が2週間以上続くと、戻りにくくなるのではないかと、このまま長い間引きこもってしまうのではないかとという不安を本人も家族も抱きます。そのことが自信をますます失わせて、前に向かうことを諦めてしまいます。

こうなると、いくら時間を経てもひきこもりは解決しません。本人と家族が孤立してしまいます。まわりからの支援が必要になります。

## ひきこもりの回復段階と家族の支援策

	状況	家族の支援策
葛藤期	イライラ、焦り。身体の不調。攻撃性。	安心してひきこもる環境。守る愛が中心。ストレスを解放する。
自閉期	人の交流を絶つ。昼夜逆転。	安心してひきこもりから脱出できる環境を与える。
試行期	少しずつ社会との接点を回復する。成功と失敗を繰り返す。	変化への希望、放す愛が中心
回復期	自分の居場所を見出し、自信を回復する。	家族の自信の回復

## 葛藤期

他者との関わりに傷つき撤退します。ひきこもっていることに焦りを感じると、イライラして暴力を振るうこともあります。

まわりの人は、ゆっくり自信を回復するために、焦らず安心してひきこまれる環境を整えます。本人が立ち直る力を信じて、まわりの人は口を出さず暖かく見守ります。

1-2週間でストレスが癒され、社会に復帰します。

## 自閉期

2週間以上ひきこもっていると、ひきこもっていること自体がストレスとなります。復帰するきっかけを失うと長期化します。まわりの人は積極的に働きかけ、安心してひきこもりから脱出できる環境を与えます。

## 試行期

学校や社会に少しずつ復帰します。失敗と成功を繰り返しながら、少しずつ他者と関わる自信を回復します。家族は放す愛を与えます。

## 回復期

学校や社会に自分が安心できる居場所を見出します。家族は自信を回復し、成長した子どもを信頼できるようになります。

## 子どもの自立を促す関わり方

### 強い心と弱い心

人は強い心と弱い心の両方を持っています。

**強い心**とは回復力 *resilience*、言い換えれば**心の元気さ**のことです。

逆境に遭遇しても自信を失わず、困難に挑戦し、なんとか乗り越えようと前に進みます。相手から傷つけられても撤退せず、人と関わり続けます。

**弱い心**とは、**傷つきやすさ** *vulnerability* のことです。

自分はダメな人間と思ひ込み、周りの人が自分のことをどう見ているかとても気になり、人の視線を気にします。人の言葉や些細な行動を否定的にとらえ、人と関わることに自信を失います。傷かないように、ひきこもります。もともと「弱い人」「強い人」というのはありません。だれでも弱い心と強い心の両方を持っていて、その割合が変化しているだけです。弱い心が増える状況とは、逆境や失敗体験が重なる時、喪失体験の悲しみが強い時、ストレスが加わり疲れがたまる時、孤立して理解してくれる人がいない時などです。強い心が増える状況とは、物事がうまくいっている時、良き理解者が近くにいる時などです。

弱い心の割合が高くなると、**自分は弱い人間だ**と思ひ込みます。しかし実際には、弱い心が前面に出て、強い心が陰に隠れ見えなくなっているだけです。

強い心の割合が高くなると、自分には**乗り越える力がある**と自信を回復します。

状況によって、人はいくらでも弱くなります。

状況によって、人はいくらでも強くなれます。

ですから、諦める必要はまったくありません。

諦めてはいけません。

### どうしたら、ひきこもりから抜け出すことができるのでしょうか？

**強い心**が十分に機能するようになれば、自然にひきこもりから脱します。

### すべての人は自立する力を持っています

身体の栄養さえ足りていれば、子どもは自然に背が伸びます。その栄養素はたんぱく質、炭水化物、ミネラルなど食事に含まれています。自律する力も同じ考え方です。心の栄養さえ足りていれば、子どもは自然とウチの世界から巣立ちソトの世界に飛び立ちます。

その栄養素は、**守る愛**と**放す愛**という親など身近な人の二種類の愛情です。

### 子どもの自立をうながす二種類の愛情

守る愛	放す愛
危機の回避・保護	傷つきへの挑戦
問題の早く見つけ保護する	本人を信頼して問題解決を任せる
傷つきやすさをカバーする	回復力を信じる
ウチの世界の万能的自我を承認する	ソトの世界の傷ついた自我を承認する
安定性を保つ	変化と成長を促す

**守る愛**は、子どもを無条件に愛し、そのままの姿を肯定します。思春期前の幼い子どもにとって重要です。

**放す愛**は、子どもの回復力を信じて、困難に挑戦する勇気を与えます。自立して、ソトの関係性に導きます。思春期には放す愛が重要になります。

自立する栄養素は、人との関わりの中にあります。

ソトの世界との接点が維持されていれば、人々との関わりから栄養を吸収できます。種々雑多な人々と試行錯誤を繰り返しながら、大人の関係性を少しずつ身につけていきます。家族はそれほど活躍する必要はありません。

### 家族が子どもに自信を与え、ひきこもりを回復する

しかし、ひきこもると、ソトの人たちとの交流が途絶えます。唯一、関わることができるのは、家族の人たちです。家族が良質なふたつの栄養素（守る愛と放す愛）をたっぷり与えます。

ひきこもりの脱出には、家族の力がとても大切になります。

ひきこもりの**葛藤期**には、ストレスから身を守ろうとする子どもを信じて、**守る愛**を与えます。親は口出しをせず、子どもに任せて、**安心してひきこまれる環境**を提供します。

ひきこもりの**自閉期**と**試行期**には、子どもの潜在力を信じて、**放す愛**をたくさん与えます。**安心してひきこもりから脱する環境**と、社会に戻る勇気を与えます。

よくカウンセラー（心の専門家）は「ひきこもっている子に対して親や周りの人は、何も口出しせず、子どもが自らの力で回復するのを待ちましょう。」と言います。これは葛藤

期に大切です。親の過剰な言動は、子どもにとってストレスとなります。

しかし、**自閉期と試行期**には逆効果です。子どもの関係性から大人の関係性に切り替えることができず、ひきこもりが長期化します。この時期に家族は**放す愛**をたっぷり与え、安心して社会に飛び出す環境を与えます。

## 親の強い心と弱い心

親の心にも強い心と弱い心があります。

**親の強い心**は子どもを信頼して、子どもの状況をよく見極め、守る愛と放す愛を上手に使い分けます。子どもに安心感を与えます。

**親の弱い心**は、子どもが傷つくことをとても心配します。子どもに不安感を与えます。

そして、守る愛と放す愛のバランスを失います。放す愛が必要な時にも、守る愛を与えすぎてしまいます。子どものことを先回りして心配して、子どもにたくさん口を出したり、守りすぎてしまいます。自立したい思春期の子どもは、そのような関わりをとても嫌がります。

あるいは、不適切な**放す愛**を与えてしまいます。子どもは、親との良い関わりを求めています。しかし、子どもが親から何かを言われるのを嫌がるだろう、親からの影響を嫌がるだろうと過剰に心配して、親は何もしない方が良いと思い込んでしまいます。結果的に、

**腫れ物に触るように**子どもに接し、**親の愛**を何も与えられなくなります。

子どもがひきこもると、親は自分の失敗と受け止めて、子どもに関わる自信を失い、**弱い心**が増殖していきます。

## 腫れ物に触る対応から決別し、親としての**自信の回復**へ

親が弱い心で満ちていると、子どもを傷つけることを恐れ、親が伝えるべきことを何も伝えられなくなり、その結果、子どもの言いなりになってしまいます。ひきこもった初期の葛藤期には、親は刺激せず子どもの回復力を待つことが大切ですが、自閉期と試行期には、子どもをプラスの方向に刺激して、ひきこもりから脱して社会に飛び立つためのガイドラインを子どもに与えます。

親が子どもに関わる自信を回復すると、子どもも社会の人と関わる自信を回復できます。

## 家族の力を生かす

これまでの説明で、ひきこもりの回復には、親の**強い心**と**放す愛**が重要なことをお分かりいただけたと思います。

ひきこもりに限らず、**家族の力**は、子どもや家族の問題を回復へ導きます。家族の力とは、家族みんなが**強い心**をしっかり保持して、ちゃんと**繋がっている**状態です。そのためにできることを具体的に説明します。

### 孤立した子育てからの解放

子育ては難しいものです。一人だけではうまくいきません。

子どもが学校に上がるまでは保育園や地域の子育てサポートもあり、若い父親も積極的に子育てに参加します。しかし、小学校に上がると、一見手がかからなくなるので、母親一人で育てられると思いがちです。

思春期の子育ては難しいものです。思春期こそ多くの子育てサポートが必要です。

### 母親中心の子育てからの脱却

児童期から思春期に入ると、子どもへの関わりが格段に難しくなります。手はかかりませんが、高度な判断が求められます。子どもは自立しようとして親に反抗します。親も子どもも傷つきます。親は守るべきか、放すべきか迷います。誰にも相談できず、ひとりで子どもに関わっていると、どうしても保守的になり、のびのびとした元気な子育てが出来ません。どうしても安全な方向、つまり守る愛に傾きがちになります。

母親ひとりだけではなく、子育て体験を同じ目線で関わる人が必要です。

### 父親と母親が協力する

思春期の親は働き盛りの世代で、仕事のストレスも大きく、子どもや家庭のことを考える余裕がありません。夫婦で子どものことを話し合う時間も十分ではありません。子どもが順調に成長している時は、それでも構いません。

しかし、子どもに問題の兆しが見えた時、父親は仕事の忙しさを乗り越えて、家族の時間を意図的に作り出します。たくさんの時間は必要としません。短時間でも良いから、毎日子どもの様子を情報交換して、どう関わったら良いのか、両親でよく話し合います。それが家族の力です。

### 母親と父親が折り合う

男親と女親は考え方が違うものです。

伝統的に、母親は守る愛を、父親は放す愛を発揮します。

困難な状況に遭遇した時、母親は「無理しない方が良い」と伝え、父親は「困難に立ち向かえ」と伝えたりします。

言っていることは反対なのですが、どちらが正しくてどちらが間違っているということではありません。両方の要素が必要です。両方のやり方を折り合わせて、子どもに関わってあげてください。

## 家族の負の遺産を整理する

家族はプラスとマイナスの体験を前の世代から引き継いでいます。負の遺産を多く抱えていると、プラスの家族の力を発揮できません。家族の力を発揮するために、棚上げしていた遺産を整理します。具体的には次のような体験です。

### 1) 喪失の悲しみ

死別や離別によってパートナーを失った時、あるいは子どもを突然失った時、親は守る愛に傾きがちになります。特に、家族を自死により失う痛手はとても大きいものです。はととても辛いので、記憶を心の冷凍庫に凍らせています。しかし、心に秘めた悲しみいつまでも消化できません。

悲しみを整理するためには、それを安全に語り、触れてはいけない思い出から、想起しても大丈夫な思い出に変換します。

### 2) 失敗体験

過去の失敗から回復できていないと、また失敗を繰り返すのではと心配します。

例えば、子どもの頃、ひきこもっている人が家族にいと、親になっても自分の子どもがひきこもるのではと心配します。きょうだいと親と葛藤している姿に傷つくと、親との葛藤を避け「いい子」を演じようとしています。

### 3) 心配性の世代間伝達

自分の親からたくさん心配を受けると、過剰に心配すること（弱い心）が家族の伝統となり、自分の子どもにも必要以上にたくさん心配します。

タイムマシンで過去に戻り、これらの遺産（喪失・失敗・心配性）を取り消すことはできません。負の遺産を思い出すのはとても辛いのですが、その体験を言葉で語り、信頼できる人に受け止め、理解してもらいます。すると、今までは「語るができない、恥ずかしい、自尊心を下げる体験」が、「辛いけれど話すことが出来て、人が理解してくれて、同じような境遇に遭遇すれば誰にでも起こりうる体験」に変換されます。そうすれば、自分を責める必要がなくなり、過去の遺産を清算できます。

家族を縛っていた負の力から解放されると、新たな**家族の力**を呼び戻すことができます。

## 家族のシコリを解きほぐす

問題に直面し、家族が力を合わせるためには、夫婦がお互いの気持ちを近づけなければなりません。そのことは十分に理解しても、心情的に近づけない理由があります。

夫婦の間には、未だに解決されていない過去のシコリが残っているものです。お互いに

距離を開けて関わらないようにしていれば、シコリを残しておいても仕方がないでしょう。しかし、家族の力をフルに発揮するには、それまで考えないようにしていた過去のシコリを見つめ、棚卸しして整理します。たとえば、次のようなシコリがよくあります。

### 夫婦間の暴力(DV)

浮気、暴力(DV)、アルコール、ギャンブルなどは、女性が被害者になりますが、最近では逆のパターン、つまり男性が被害者になることもあります。暴力(DV)には、腕力による身体的暴力ばかりでなく、性的暴力、経済的におとしめる暴力などがあります。また、心理的暴力として言葉の暴力、無視する暴力、夫婦として支え合い必要なコミュニケーションをとろうとしない暴力もあります。

### 子育てに関わってこなかったというトラウマ

母親が家事育児を担当して、父親が外で稼ぐという役割分担が人々の意識の中に根強く残っているために、父親が子育てに関わらないことがそれほど問題だとは意識されにくいものです。しかし、子育てに苦勞している時に、一緒に関わってくれなかったというトラウマ(心の傷)は深く心に残ります。子どもが大きくなり思春期に達して父親の関わりが大切と言われても、今まで関わってこなかった人がうまく関わられるわけがないと、夫のことを信用できません。

### 言葉を交わさないトラウマ

必要最小限の用事や、社会の出来事など理屈(理性)は話せても、お互いの気持ち(感性)を語り合えない夫婦がいます。気持ちが通じ合わないと、夫婦としての実感と安心感を持つことが出来ません。

### セックスレスというトラウマ

人々は二つのコミュニケーション様式を用いて、親密さを成就します。ひとつが気持ちの触れ合い(言葉によるコミュニケーション)であり、もうひとつが身体の触れ合い(スキンシップ、そして夫婦間のセックス)です。言葉は理性を持った人間だけの特技ですが、スキンシップはまだ言葉を持たない赤ちゃんや、哺乳類動物でさえとても大切なコミュニケーションです。若い頃の生殖のためのセックスを終えた後、コミュニケーションのためのセックスを夫婦が行えないと、身体を通した安心を得ることができません。

### 実家とのトラウマ

「嫁と姑」に代表される実家とのいざこざはどの家族にもあるものです。夫がしっかり仲介して、妻を守ってくれば良いのですが、そのことから逃げていたり、実家側に付いたりすると、妻の痛みは大きなものです。妻がどれほど辛かったか、夫は未だに理解していません。

過去に起きた出来事は、たとえ現在は収まっても傷の痛みは消えません。夫婦が深く気持ちを通じ合わせることが出来ません。

シコリを整理するためには、まず言葉に出してみる事です。直接相手に伝えることが難しかったら、まず信頼できる人に打ち明けてみましょう。友だちや専門家など、家族ではない第三者が良いです。

## 安心できるガイドラインを与える

思春期は学校、進路、就職、結婚と、さまざまな選択肢が待ち受けています。道に迷った時、どの方向に進んだらよいのか明確なガイドラインが必要です。決めるのは本人です。しかし、どの道が安全で選んでも良い道なのかを示すのは親の役目です。

子どもに問題が生じると、親はどう子どもに関わったらよいのか迷います。

- 今、子どもに何が起きているのか？
- なぜ、そうなるの？
- どうすれば解決できるのか？
- 子どもにどう接したら良いのか？

これらの疑問に答えてくれる明確なガイドラインが必要です。

今まで行ってきたやり方でうまくいかなければ、違った新しい視点が必要です。

そのために、子どもと家族を支援してくれる第三者につながります。田村研究室では、子どもと家族の正確なアセスメントを行い、的確なアドバイスをお伝えします。

### 『質疑応答』

#### 質問者①

質問 e ランコースの担任をしていますが、1歩を踏み出すためには、どのような声掛けをすれば良いのか。また、回復力をつけるためにも成功体験が必要だと考えますが、どのようにすればよいのか悩んでいます。

解答 まずは、声掛けの基本ですが、肯定的（プラス）なメッセージを送ることが大切である。どんな小さなことでもそれが、小さな成功体験になります。

質問 それはどのような物でも構わないのですか。

解答 学校によく来られたね。勉強の内容のことでも構いません。どんな小さなことでも褒める。褒めることのシャワーである。また伝えることが必要である。

#### 質問者②

質問 自分の知り合いですが、大学に通い始めたが、その大学に納得がいけない。学歴コンプレックスがあり、自己万能感が強い。その結果引きこもりになっていくような人にはどのように接すればよいのか。

解答 どのように声掛けしたらよいかわからない。これは、声を掛けする勇気がないという事なのです。仮に声を掛けるとしたら、どのような内容で声掛けるかの問いに、一般的ではあるがしっかりしたことを考えていました。すなわち声を掛ける内容は頭にあるが、声を掛ける勇気ないという事なのです。

質問者③

質問 先日、中学3年生の入学相談を行った際に、うちの子は、起立性調節障害と診断された。医師がどのような症状から診断されるのか。また、家族に対しどのような症状なのか尋ねるのはどのようにしたら良いか。

解答 起立性調節障害とは、一般的に貧血のことです。症状としては朝起きれないなど、血流が一時的に滞り脳への血流が減ってしまい、自律神経が失調してしまう。

質問 それだけの理由で学校へ通えないとの診断書が出るのですか。

解答 診断書は書きます。学校へ通えないとの安心の担保です。しかし、診断書は、病気でなければ書けませんから、病名をつけるわけです。  
一つの免罪符としての意味合いです。

『最後に』 吉田校長

本日は、実例を挙げさせていただきながら講演をさせていただき、大変わかりやすく拝聴いたしました。本校の生徒たちの近年の家庭環境の変化が問題行動をする生徒と無関係ではないように感じています。学校にすべてを任せるといった問題ではないのです。

生徒の問題行動がどのような原因なのかわからないものも多く、これから学校として、どのように対応していけるのか。事例を検証し積み上げ方向性を出せればと考えています。

本日の先生の講演を検証の礎の1つとして、これからも取り組んでいきたいと思っております。本日は、ありがとうございました。



会議名	第10回 多様な学習支援事業に関する検討会議
開催日時	平成29年8月24日(木) 10:00~14:00
場所	静進情報高等専修学校
出席者	別紙資料
議題等	<p>1. 第2分科会報告  「不登校生などへの指導事例」  静進情報高等専修学校 校長 柳澤岳志  事例研究</p> <p>2. 講演 児童思春期精神科医 田村 毅 様  「不登校を抱える生徒たちとの関わり方」  ～私たちができること・できないこと～</p> <p>3. 指導助言</p>

## 今後の調査研究について

報告者：静進情報高等専修学校 校長 柳澤岳志

### ◆1 これまでの調査研究による考察

本校は 2000 年の開校当初より不登校や別室登校の生徒を対象としてきました。この 17 年間、本校の生徒たちと関わってくる中で「外側（学校のプログラムや教員の関わり）から不登校を治す」というのは我々の驕りであると言わざるを得ません。やはり最終的には本人（個人）の内面が変わらなければ不登校は治らないのです。そしてこの内面の変化を起こすのは本人（個人）でなければならぬのです。多くの場合、我々（学校）ができることはそのきっかけとなる事象を準備しておく事に限られます。

登校率だけを見れば、一見すると「治った」と思われる者もいますが、非常に危ういバランスの上に立っています。これは大人や子どもに関係なく、誰しにも言える事です。現代社会を生きる私たちを取り巻く様々な要因のうち一つでもバランスが崩れば、いつでも不登校や引きこもり、うつ病などの精神疾患は起こりうるものだと考えます。

近年における「不登校」という現象は、既存の社会による「締めつけ」と、最近の主流である「個人主義の推奨」との狭間で生まれてくるものではないでしょうか。例えば、「それぞれの生き方や考え方があって良い」（個人主義）と言っている割には、「高校くらい卒業しなければ働き口は無い」（締めつけ）という考え方がまだまだ支配的です。そういった中で活力と行動力がある若者は、親や学校の制止をものともせず行動に出る事ができるでしょう。しかしそこまでの行動力も無く、自分の中で上手く折り合いを付けられない子は、「不登校」という行動に出るしかないのかも知れません。

少し話が逸れますが、一個人における「危険（ストレスを含む）」の割合というのは、太古の昔からさほど変わっていないと思っています。例えば、盲腸という病気に関していえば、現代ではさほど危険な病気のイメージはありませんが、手術方法が確立される以前は多くの方が命を落としてきた病気であろう事は想像に難くありません。なぜ死に至るのか原因すらも分からなかったことでしょう。私たちは長い歴史の中で「安心」「安全」を追い求めてきた訳ですが、いざそれら（主に身体面・生活面での安全）が整ってくると「心」に問題が起こってくるようです。食料事情が安定せず、明日食うものがあるかどうか分からない時代には、「引きこもる」などという事は出来なかったでしょう。社会が便利になり、飽食の時代になってきたからこそ引きこもれてしまうという側面は多分にあると思います。実際、調査研究対象者で引きこもり傾向が強い生徒たちも、全員人間らしい生活を送っています。むしろ物質的には何不自由なく満ち足りています。命を脅かされる事なく、健康的に引きこもれてしまうという歪んだ現象が起こっているのです。本人たちにとっては、SNS 等でコミュニケーションは取っているのに、引きこもっているという感覚では無いのかも知れません。

## ◆2 最終年度における調査課題

これまでの2年間における調査研究によって、校内の環境を大きく変え、整えてきました。最も意識をしたのは、「居場所を作る」という点です。▶ 別途写真資料を参照の事

研究の最終年度となる3年目においては、これらの校内環境における実際の効果について調査を実施していきます。

## ◆3 不登校を引き起こす要因について

不登校や引きこもりという現象を引き起こす可能性が高いと考えられる要因を3つ挙げてみます。

### □ 内的要因（持って生まれた性格的な要因）

（神経質か図太いか、というのはやはり影響すると思われる。ただ保護者の気質と似ている傾向は高いので、先天的なのか後天的なのかは何とも言えない。傾向としては調査研究対象の生徒たちは、繊細な子が圧倒的に多い。）

### □ 家庭の問題（親の世界観や接し方の問題）

過保護・過干渉、逆に放任の傾向は大いに感じる。「本人の意思に任せている」という弁を良く耳にするが、聞こえは良いが責任放棄に思えてならない事が多々ある。覚悟を持って子どもと向き合えていない親が大変多いように感じている。「子どもが何を考えているか全くわからない」「子どもには何も言えない」「どうして良いか分からない」「会話ができない」「子どもが怖い」…など耳を疑うような言葉は枚挙にいとまがない。そして多くの場合、そこに父親の影を感じることは無く、いつも母親が孤軍奮闘している印象を受ける。

### □ 外的要因（ゲームやスマホ・SNS）

今のゲームははっきり言って面白すぎる。さらにオンラインで繋がっているので、ゲームによる現実逃避という考え方は当てはまらない。ゲームの先に世界（人間関係）があるのです。これは外にコミュニティーを築いているので、一概に悪いことではないが、家庭が無制限にやれる環境を与えてしまっている場合は大きな問題である。ゲームで生活リズムを崩し不登校になるのは、ほぼ男子生徒に限られているのも特筆すべき点である。

総じて思うことは、いつの時代も子どもたちは被害者であるという事です。ただし、そればかりを論じては何も始まらないのもまた事実です。ここ最近の子どもたちを取り巻く情報量の多さとスピードには大きな問題を含んでいるという事を我々大人は認識しておくべきです。現代の子どもたちは、一人での時間・自分だけの時間が圧倒的に不足しているように感じます。25年前位を考えると、当時の中学生ないし高校生は家に帰れば一人の時間が保証されていました。今ではラインがそれを許してくれません。常に他者を

気にして生活しなくてはならないのは、大変なストレスと弊害を生じさせていると思われます。そして、SNSの使用バランスを自己コントロールするのは10代の子どもたちには、かなりハードルが高い事であるのは間違いありません。ここを「もう高校生だから…」と費用を負担し、管理全般を本人に任せるのはあまりにも代償が大きいと言わざるを得ないでしょう。しかし、現実には「皆持っている」「持っていないと友達ができない」「買ってくれないと学校に行かない」…という条件闘争に本校の多くの保護者は負けてしまうのです。

#### ◆4 調査研究対象者における不登校の傾向

	タイプ（高校入学前の本人の気持ち）	高校生活への期待度	該当数 (在校生 61名)
1	自分を変えるチャンスを伺っている	かなり高い	17名
2	高校は卒業したいと思っているが自信は無い	意外と高い	26名
3	親や先生が言うので受動的にとりあえず進学	低い	17名
4	そもそも高校卒業に価値を感じていない(無気力)	ほぼ無い	1名

#### ◆5 上表タイプ別に見る入学後の状況

##### 1. 自分を変えるチャンスを伺っている（17名）

A	不登校から脱した（と思われる）	11名	65%
B	ほぼ不登校から脱している	2名	12%
C	まだまだ登校が不安定	4名	23%
D	ほぼ引きこもり状態	0名	0%

##### 2. 高校は卒業したいと思っているが自信は無い（26名）

A	不登校から脱した（と思われる）	10名	38%
B	ほぼ不登校から脱している	1名	4%
C	まだまだ登校が不安定	13名	50%
D	ほぼ引きこもり状態	2名	8%

##### 3. 親や先生が言うので受動的にとりあえず進学（17名）

A	不登校から脱した（と思われる）	0名	0%
B	ほぼ不登校から脱している	3名	18%
C	まだまだ登校が不安定	9名	53%
D	ほぼ引きこもり状態	5名	29%

#### 4. そもそも高校卒業に価値を感じていない（1名）

A	不登校から脱した（と思われる）	0名	0%
B	ほぼ不登校から脱している	0名	0%
C	まだまだ登校が不安定	0名	0%
D	ほぼ引きこもり状態	1名	100%

#### 対応可能な範囲

本人が「高校は卒業したい（しないとまずい）」「変わりたい」と、少しでも良いから思っている場合は何とかなる割合が高くなります。

また、また完全受け身（親や先生から言われて来た）の子であっても、反社会的な言動を起こさないタイプの子であれば、長い時間を掛けて心身の成長と共に、気持ちも前向きになっていくケースもあります。

#### 対応できない範囲

知的障害がある子、強い自殺願望がある子（リストカットは基本的には強い自殺願望ではありません。本校では定期的に出る行為です。）また、自閉症・起立性調節障害・ADHD・学習障害・発達障害…、など診断名を挙げればきりがありませんが、全て本校の在籍生徒におります。ポイントとなるのは、その子に専属の教員を付けることはできないので、その条件下で学校生活を送れる子であれば丁寧に対応していきます。

※反社会的な行動（暴力・窃盗・法律違反など）が顕著な子も本校では対応できません。

## ◆6 学校ができること

### 1. 「待つ」という事

意外と難しいのがこの「待つ」という事です。基本的に学校としてもお預かりした以上、3年間で卒業させたいと思いますし、保護者の方もせっかく高校に進学したのだから通って欲しい、という思いから焦ります。ただ場合によってはこの焦りが本人に伝わってしまい、状況をこじらせる事も少なくありません。

事実、調査研究対象者の中にも「4年間で卒業」「5年間で卒業」を目指している生徒も在籍しています。いずれも入学後、1年間以上の沈黙期間を経て自ら立ち直りました。

この間、学校がした事（できた事）というのは、学籍を残しておくという事だけです。

### 2. 多様な居場所の形を用意する

生徒が学校に求めている事は実に様々です。既存の学校のスタイル（担任がいて、自分のクラスがあり、教室で授業を受ける等）を求めている子もいれば、そういったスタイルに抵抗がある生徒もいます。具体例として、現在、本校で定期的にカウンセリングを担当してくれている臨床心理士に生徒が打ち明けた話の一部を示します。

「(学校には) 慣れてきた。この学校は一人でもおかしくないからいい。」

実際、本校には生徒のニーズに合わせた居場所を可能な限り用意しています。ひと

つ重要な点は、ゆくゆくは自己も認め、他者も認め、共生の中に意義や喜びを見出せるようになって欲しいと願っていることです。決して排他的で良い、という事はありません。入学当初の生徒には様々な理由から、他者の考え方や世界観に対して寛容度が低い子も多く見受けられます。

### **3. 多様な実体験の場を用意する**

今回の調査研究対象生徒の多くに「経験不足」を感じます。本校では、テレビで見た、ネットで見た、ではなく自分の五感で感じる事が何よりも重要であると考えています。

本校では年間を通して、様々なイベント（行事）を行っています。昨年度は、大きく6項目に分けて行いました。生徒たちにとっては、いつ・何処で・何が心に響くのかはやってみないと分からない部分が多く、毎回新しい発見があります。

何より「教員が楽しんでいること」が重要な要素にもなります。

▼2016 年度に行われた主なイベント一覧

ADVENTURE (冒険)	4月 谷津山トレッキング 5月 駿府城歴史散策 8月～10月 清水港クルージング (5回実施)
KNOWLEDGE (知識)	6月 修学旅行 (広島・直島・倉敷) 2泊3日 6月 バンダイホビーセンター見学 11月 ふじのくに地球環境ミュージアム
ART (芸術)	7月 静岡県立美術館 (ミッフィー展) 鑑賞 8月 劇団四季ミュージカル (West Side Story) 観劇 12月 静岡市美術館 (スタジオジブリ展) 鑑賞 2月 演劇鑑賞 劇団 SPAC (真夏の夜の夢) 観劇
EXPERIENCE (体験)	6月 蕎麦打ち体験 11月 静進祭 (本校の文化祭です) 12月 餅つき大会 (終業式後) 1月 初詣 (静岡懸護國神社)
SPORTS (運動)	7月 第1回スポーツ大会 (静岡中央体育館) 11月 第2回スポーツ大会 (静岡中央体育館)
MUSIC (音楽)	9月 静岡音楽館 AOI ギターコンサート 11月 静岡音楽館 AOI トランペットコンサート

※参加は全て自由となっており、強制のものはありません。

会議名	第11回 多様な学習支援事業に関する検討会議														
開催日時	平成29年9月26日(火)	14:00~16:00													
場所	科学技術学園高等学校 301教室														
出席者	別紙資料														
議題等	<p>1.第4分科会研究  全日制高校において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究</p> <p>2.報告</p> <p>(1) 本校通信制について 松田通信制課程教頭</p> <p>(2) 本校 定時制課程における通信制の活用 入江定時制課程教頭</p> <p>(3) 全日制とのコラボレーションの問題点 杉下 理事長</p> <p>3.意見交換</p> <table border="0"> <tr> <td>新潟青陵高等学校</td> <td>教務部長</td> <td>金子 昌弘 様</td> </tr> <tr> <td>横須賀学院高等学校</td> <td>副校長</td> <td>平賀 正雄 様</td> </tr> <tr> <td>横浜学園高等学校</td> <td>副校長</td> <td>船津 和良 様</td> </tr> <tr> <td>柳川高等学校</td> <td>副校長</td> <td>森 繁光 様</td> </tr> </table>			新潟青陵高等学校	教務部長	金子 昌弘 様	横須賀学院高等学校	副校長	平賀 正雄 様	横浜学園高等学校	副校長	船津 和良 様	柳川高等学校	副校長	森 繁光 様
新潟青陵高等学校	教務部長	金子 昌弘 様													
横須賀学院高等学校	副校長	平賀 正雄 様													
横浜学園高等学校	副校長	船津 和良 様													
柳川高等学校	副校長	森 繁光 様													



全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と  
全通併修についての調査研究  
(第4分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業検討会議

かぎこうの通信制課程について①

1964年(昭和39年)開校

- ① 中学卒業後、企業内訓練校で学ぶ生徒
- ② 公立は都道府県内のみしか対応できない
- ③ 広域に対応できる通信制高校が必要

かぎこうの通信制課程について②

「かぎこう」の学習

- ① 学習指導要領上に定められた分量
- ② 普通科目のスクーリング、添削指導
- ③ 高等学校としての単位認定



高等学校卒業資格を付与することが役割

かぎこうの通信制課程について③

「卒業資格を付与するだけの時代は終わり」

学園創立50周年を機に第2章の幕あけ

「個々の生徒に何ができるか」がテーマ

- ① 「学習の実体があり、きちんと学ぶ通信制」
- ② 「生徒に合わせた教材開発」

昨年度、学園幹部会議において  
50周年時の方針を転換した

かぎこうの通信制課程について④

学習書の内製化

通信制は規定により、授業に代わる「学習書」を使うことが決められている。

「学習書」…教科書を自学自習できるよう解説したものが基本

既存の学習書  
(NHK出版)

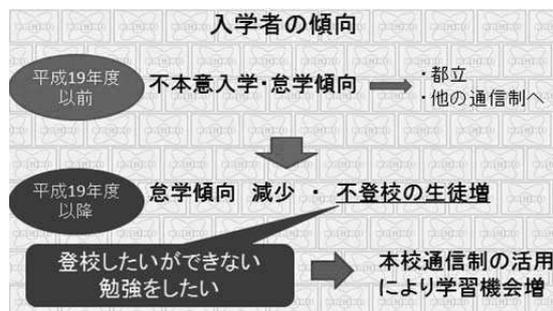
- ・ 教員が使用する「指導書」に近い形式
- ・ 個々のレベルに対応できていない  
→ 通信制高校には多様な学力の生徒が在籍している

内製化した「かぎこう」の「学習書」

- ・ 各單元ごとのポイントを押さえたうえで問題を解く。  
または発展的な調べ学習への導き
- ・ 英語については、教科書を中心として実用英語検定の各級に対応した教材。  
(検定対策としても利用可能)
- ・ 基礎・応用・発展の様々なレベル
- ・ 「かぎこう」採用以外の教科書にも対応

## 本校定時制における通信制の活用

科学技術学園高等学校 定時制課程



## 本校定時制教育の改革

■教員の意識改革(平成17年度～)

(1)生徒に原因を求めない  
 (2)従来の指導方法の見直し

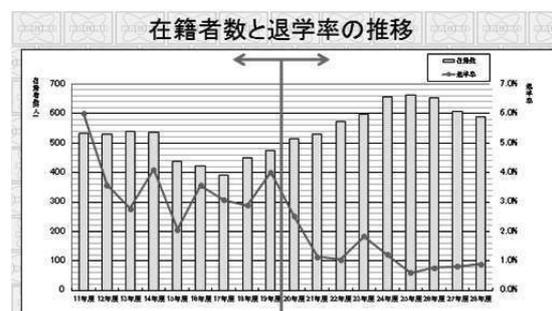
ア 試験や成績等での締め付け → 留年しない制度  
 イ 聞かせる授業の実践 ※現在は「わかる授業」を実践  
 ウ 一方的指導からの転換 → 生徒の話を聞く姿勢

### 不登校傾向生徒の対応

(1)定通併修の利用(1年生のみ)

【導入当初】  
 ○様々な問題点  
 ・「楽して単位が取れる」など  
 →時間の経過と共に「形式的」「機械的」になってしまった。

【現在】  
 担任(学年)・生徒・保護者間のコミュニケーションを密にとり、  
 通学への機会を作っている。



## 全通併修制度の推進について (第4分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

- ### 全日制とのコラボレーションの問題点
- 通信制全般に対する不信感
    - 安易な単位認定・卒業認定
    - 学習活動・学習量への不安
    - サポート校などに見られる安易な勧誘
    - 都道府県協会のルールを無視した募集活動
  - 教職員全般の反発
    - 上記の通り
    - かっちりとした教育課程・教育活動から見た通信制への不透明性
    - 他の生徒への影響